

# 地域連携・フロンティアセンター

2019（令和元）年度実績報告



## 目次

I. 目的と運営 .....	1
A. 目的.....	1
B. 組織運営 .....	1
II. 事業 .....	3
A. 地域連携部門委員会 .....	3
1. 公開講座 .....	3
2. 広尾中学校模擬授業 .....	4
3. ホームカミング・デー .....	4
4. 出張暮らしの保健室 .....	6
B. 災害看護部門委員会 .....	8
1. 武蔵野地域防災活動 .....	8
2. 日赤広尾防災プロジェクト .....	10
3. なみえプロジェクト .....	13
4. 和歌山県湯浅町学校防災プロジェクト.....	14
C. 継続教育部門委員会 .....	16
1. フロンティアセミナー部会 .....	16
2. 認定スキルアップセミナー .....	17
3. 実習指導者研修会.....	18
D. 実践研究部門委員会 .....	25
1. リサーチフェスタ 2019.....	25
E. ケアリング・フロンティア広尾 プロジェクト .....	27
a. 赤十字リサーチ・フェスタ .....	27
b. “最期までその人らしい生き方を支えるケア” プロジェクト .....	28
c. UNICEF/WHO 母乳育児支援 20 時間コース基礎セミナー .....	29
d. 小児看護研究会 CandY (Children and You) .....	30
e. 精神科看護事例セミナー .....	31
f. TRC 研究会 (Total Renal Care) .....	32
g. セルフケア能力を高める支援の検討会 (SCAQ 研究会) .....	33
h. シームレスな看護師教育モデルの検討.....	34

# I. 目的と運営

## A. 目的

日本赤十字看護大学地域連携・フロンティアセンター（以下、フロンティアセンターという）は、日本赤十字看護大学が、これまでの知的・実践的な活動をもとに、人々に求められる看護を追究し、開かれた大学をめざして平成17年8月に開設された看護実践・教育・研究フロンティアセンターを前身としている。

斬新な発想で創造的な活動を行う必要があるという認識のもとにスタートし、10年目を迎えた平成27年度には地域連携の推進をその活動の中心的役割を担うことを目的に加え、本学が掲げる地域連携ポリシーのもと、地域連携・フロンティアセンターとして再び新たに出発した。

平成29年度4月に地域連携委員会とフロンティアセンター運営委員会が統合され、地域連携・フロンティアセンター運営委員会という組織とされた。同時に本学の地域社会連携ポリシーは地域社会連携、産官学連携が強調され、組織、機能に関する規定も下記のとおり改正された。

本センターは、建学の精神である人道に基づき、地域住民の健康と福祉に資することを目的に、以下の機能を果たすこととする。

- （1）多様化する地域社会の中で、求められるニーズに対応しつつ、新しい看護活動の実践を推進する。
- （2）看護実践の研究活動を通し、その知見を学内外に発信する。
- （3）看護大学としての教育機能を、国内外の社会に貢献する資源として活用する。
- （4）開かれたフロンティアセンターとして、臨床看護実践者をはじめ学外の研究者等と協働する場を提供する。

## B. 組織運営（図1）

フロンティアセンターの活動は、①地域連携部門として、公開講座、広尾中学校の模擬授業、ホームカミング・デー、都営住宅での出張暮らしの保健室、②災害看護部門として、武蔵野地域防災活動、なみえプロジェクト、日赤広尾防災プロジェクト、和歌山県湯浅町学校防災プロジェクト、③継続教育部門として、フロンティアセミナー部会、認定スキルアップセミナー部会、実習指導者研修部会、④実践研究部門として、実践と教育との連携で実施するリサーチ・フェスタの活動がある。

フロンティアセンターの運営は、地域連携・フロンティアセンター運営委員会で検討する。令和元年度、運営委員会は4回開催し、①年間計画及び会計・予算、②各事業の運営等について検討、共有した。運営に関わる財源は、原則として自主財源である。フロンティアセンター専従の職員は雇用せず、事務局が兼担している。各事業実施にあたっては、学内の教職員、災害看護ボランティアの看護学部学生や大学院学生をはじめ、これまでの事業に参加いただいている方や本学大学院修了生など幅広い力を得て運営した。

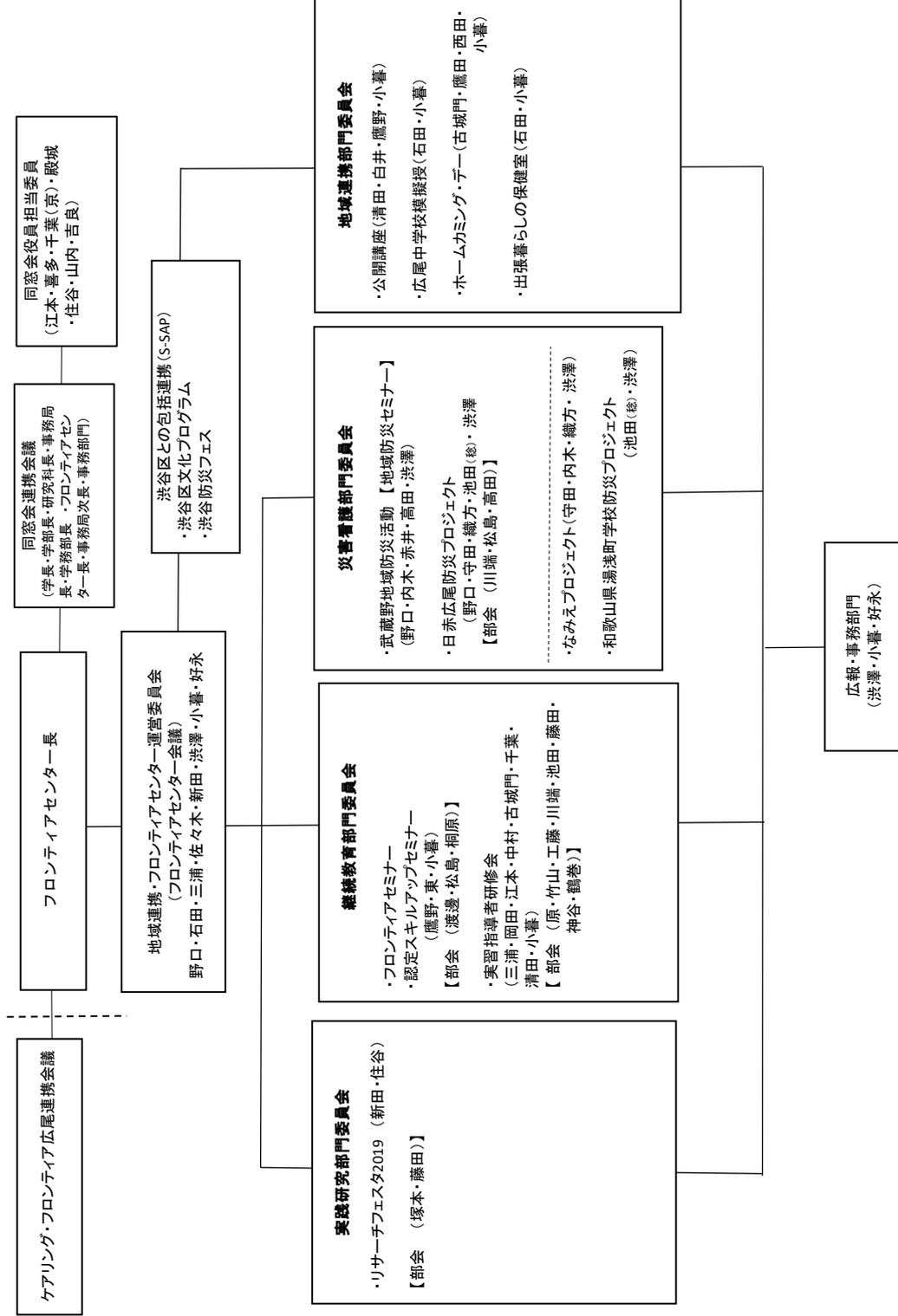
平成25年度に開始した広尾地区の保健医療福祉・教育が一体となってケアを創造するシステムとしての「ケアリング・フロンティア広尾」は7年目となり、日本赤十字社医療センター、日本赤十字社総合福祉センター、日本赤十字社助産師学校、日本赤十字社医療センター附属乳児院等と協働の独立した組織として各プロジェクトの進捗を共有し、協力体制を維持した。

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、年度末の事業を一部延期したが、組織内外での連携や意思決定は問題なく行えた。引き続き、災害、緊急時対応を組織内でも検討し、対応を確認していく必要がある。

今年度の11月11日には、聖心女子大学と本学で基本協定が締結したことで、今後、包括的連携が期待できる。さらに来年度上半期には、渋谷区との協定（S-SAP）を締結する予定であり、今後も地域社会との連携の一層の強化をめざし、新たな組織体制と活動を推進していく予定である。

図1 2019(令和元)年度 日本赤十字看護大学 地域連携・フロンティアセンター組織図

令和元年11月



## Ⅱ. 事業

### A. 地域連携部門委員会

#### 1. 公開講座

公開講座では、一般公衆の保健福祉看護に関する知識の向上を図るため、平成 9 年度から一般の方を対象に開催をしている。相互に研鑽し合えるような住民参加型の公開講座を目指し、これまでも参加された方々からは、時代のニーズに即し生活に活かせる内容であったとの意見も頂いている。現在は教員の教育研究成果を社会に還元し、高齢者向けの生涯学習支援として開講しており、多くの高齢者の方に参加いただいている。

2019 年度は、「世界のカルチャーからみた健康」をメインテーマにした。第 1 回「大航海時代とイギリスの食文化」、第 2 回「日本赤十字社が取り組んだ開発協力事業と復興支援事業：～最近の世界の事例から～」、第 3 回「健康と音楽～海外の音楽にも触れて～」の全 3 回の講座を開講した。

##### a. 公開講座の趣旨

世界を軸に、人々の生活や生き方に触れ、健康について考えることをテーマとした。また、3 回目の健康と音楽については、昨年度、申し込み数が多く参加できなかった方のためにも、今年度も音楽に触れることのできる講座として同じ講師の先生に依頼して開講した。

##### b. 活動内容

第 1 回目は、9 月 6 日（金）に本学の教養教育科目 英語の講師である遠藤花子先生より、「大航海時代とイギリスの食文化」をテーマにご講演いただいた。

イギリスの現在の食事の内容を、写真を交えて紹介いただき、イギリスの食文化を知る機会となった。

また、なぜ大航海時代が可能となったのか、なぜ大航海が必要だったのか、大航海時代の船乗りたちの悲惨な船上での食生活についてなど、クイズも加えながらお話いただいた。参加者のみなさんは、自身のイギリス旅行の体験も含めながら食事を振り返る方もいっしょに、イギリスの食文化を中心にたくさん質問が聞かれた。アンケートでは、「学生の頃留学経験あり、とてもなつかしく楽しく聞けた。」「イギリスに行ってみたくなった。」「大航海時代の日本の時代を考えたり、水の大切さに気づいた」などたくさんのご感想や学びをいただいた。

第 2 回目は、10 月 2 日（水）に日本赤十字本社・防災業務課長の辻佳輝先生より「日本赤十字社が取り組んだ開発協力事業と復興支援事業～最近の世界の事例～」をテーマにご講演いただいた。

赤十字社が行っている開発協力事業の内容や主な支援対象国をご紹介いただき、その中で、具体的にどのような協力を実施しているのか、例として、主にネパールの復興支援事業の内容をお話頂きました。2015 年のネパール地震後の復興支援事業として「住宅の再建」「貯水槽の再建」「やぎへの予防接種や家庭菜園実習」「防災マップ作り」など様々な活動について、写真を交えてお話頂いた。これらの活動を通じ、ともに助け合う「共助」の大切さを伝えていただいた。参加者皆様からのアンケートでは、非常に良かった、良かったと答えていただいた方が約 90% でした。具体的な感想として「ニュース、新聞等で日赤の活動を見聞きしていましたが、職員の方々の支援を細かく聞け、ご苦労、まだ不自由な国々が多いと実感しました。」とうご意見や「防災について自助、共助がいかに大切であるかを特に心がけたいと思いました。最近の日本の災害にもあい通じるものを感じます。」など沢山のご意見をいただいた。

第 3 回目は、11 月 1 日（金）は昨年度に引き続き、本学博士後期課程在学中でもある森祥子先生（東海大学医学部看護学科）にご担当いただき、「健康と音楽 ～海外の音楽にも触れて～」をテーマに、

ご講演、森先生の独唱、森先生、参加者の皆様の唱歌や昭和期の歌謡曲などの唱和が盛り込まれた受講

生参加型のプログラムであった。受講者数は71名で、アンケートの結果（61部回収）、プログラム内容については「非常によい」が44名、「良い」が11名と概ね好評であった。しかし、学生食堂での開催となったことについては「非常によい」22名、「良い」23名、「あまり良くない」5名で、スクリーンが常置されていない環境、プロジェクター機器の不具合など音楽プログラムを実施する上では適した環境でなかったことが反映された結果となった。

### c. 来年度の課題と展望

例年、高齢の参加者が多いことをふまえ、特に昨年度より、幅広い年代の方にも興味・関心をもっといただけるテーマを検討してきた。今年度も昨年同様に60～80代の方にはたくさん参加していただいたが、30～50代の方々にも参加していただくことができた。今後も地域の様々な年代の方に向けて発信できる講座を検討していきたい。また、広報としては、テーマだけでなく講義内容についてホームページ等で発信し、より関心を持って参加できるように試みた。来年度も上記内容を継続し、定着を図っていく。

また、音楽プログラムを実施する上ではスクリーンやプロジェクターが常置されている教室、もしくはピアノを使用するのであれば広尾ホールの活用などを検討するなど、テーマや講座の展開方法にあった適切な会場を検討、準備していく必要があると考える。

第1回公開講座



第2回公開講座



第3回公開講座



## 2. 広尾中学校模擬授業

### a. 趣旨

2014年度より、本学と同じ区内にある広尾中学校の要請を受け、中学校の科目である「総合的な学習の時間」のうち1年生を対象にした福祉教育に位置付けられる学習の一部として、本学の強みを生かした体験学習を提供することを目的としている。

### b. 活動内容

今年度は中学校側からの要請が来なかった。また、大学側も内容や実施時期を検討する必要があるため、早い段階で要望を受けたいと考えていたが、昨年度に続き実施を断念した。

### c. 来年度の課題と展望

当面の間様子を見ることとして、活動を休止する。

## 3. ホームカミング・デー

### a. 趣旨

ホームカミング・デーは、本学の卒業生・修了生の交流や卒後の学びの場を提供するために、年に1回開催されている。これまでも、卒業生・修了生が卒後の学びの場として活用できるよう、臨床現場に活かせる看護研究や子育てしながら働くことなどをテーマに教員および卒業生・修了生を招き、講演・シンポジウムを開催してきた。令和元年度は、テーマ「大学院ってどういうところ？～私たちの体験を教えます！～」とし、本学名誉教授の武井麻子先生を講師に、本学大学院修了生の鈴木健太さん（学部 21 回生・大学院修士課程・博士後期課程修了生）、川端龍人さん（学部 22 回生・大学院修士課程修了生）を講師に招いてシンポジウムを開催した。

### b. 活動内容

本年度は、令和2年1月15日（土）の10時～12時に開催した。参加者は15名（教職員を除く）であった。教職員を含めた参加人数はほぼ例年通りであった。

まず、武井麻子名誉教授より、自身の大学院での経験や本学の大学院教育の特色、大学院で学ぶことの意味などについて講演がなされた。その後、鈴木さんと川端さんから、大学院に進学した理由、仕事と学業を両立するための工夫、実際の大学院生活、大学院修了後のキャリアなどについてそれぞれ話題提供が行われた。その後、フロアを交えた質疑応答がなされた。フロアからは、大学院進学にあたり事前にやっておいた方がよいことなど、活発な質問・発言がなされた。

プログラム終了後、参加者へのアンケート調査を実施したが、すべての回答者（13名）が「非常に良かった」と回答するなど、プログラム内容に対する評価は非常に高かった。自由記述でも、「とても興味深いお話を聞くことができよかったです」「大学院のイメージができました」「大学院についてより詳しく知ることができ、キャリアの一つとして考えられた」といった肯定的なコメントが多かった。他方で、今回は大教室（201）での開催であったが、参加者が少なく、「人数に合わせてもう少し狭いお部屋の方が話しやすかった」というコメントもあった。

### c. 今後の課題と展望

例年、参加者が少ないことが課題になっており、今年は早い時期からさまざまな媒体・方法を使って広報につとめた。アンケートからは、参加者が大学ホームページやFacebook、職場に貼られたポスターなど、複数の経路から情報にアクセスしていることが分かり、広報の成果が確認された。ただ、同窓会誌と

同窓生への案内メールを見て参加したという回答者はいずれもおらず、今後どのように同窓生に情報をアナウンスしていくのか、改めて検討がなされる必要がある。また、例年同様、参加者が伸び悩んだこともあり、今後は他のイベントと同じ日に開催するなど、同窓生がより参加しやすいような企画を考えていくことも課題である。



#### 4. 出張暮らしの保健室

##### a. 趣旨

災害看護部門委員会の日赤広尾防災プロジェクト事業活動の一つとして、都営渋谷東2丁目アパートにおいて防災関係の出張講座を行った際のアンケート結果から、参加者は高齢者が多く、健康相談に関するニーズが高かったことから、地域連携部門委員会の試しのプログラムとして、同住宅の住民を対象に出張保健室を開設した。

##### b. 活動内容

構成員は、地域看護学教授1名、同領域の大学院生3名（修士1年生）、事務職員1名である。令和元年10月17日（木）10時～正午 住宅の集会室を会場として、お茶と茶菓子を準備し、血圧測定や健康相談、ミニレクチャーとして「風邪予防のポイント」を行った。当日の参加者は同住宅の住民と町会長、民生委員を含めた14名であった。

初めは緊張していた住民の方々であったが、ミニレクチャーをきっかけに話しやすい雰囲気ができ、「家にいても、年より夫婦では話が弾まない」「人と話すと元気になる」「誘いたい人がいるが、どんなふうに誘えばよいか」など話があった。また、新聞広告のチラシを利用した紙箱にお菓子を盛りつけたところ興味を持った参加者が紙箱の作り方を知りたいなど、健康面以外の話題もあり、和やかに交流ができた。当日の血圧測定では数値に問題がみられ、受診を勧めた参加者もいた。

第2回目を令和2年3月11日（水）開催について都営アパート内掲示板にポスターを掲示して案内をしていたが、新型コロナウイルスの感染拡大が懸念されたため、開催を延期するお知らせを2月21日付で住宅内掲示板に掲示した。延期後の開催時期については、未定である。

##### c. 来年度の課題と展望

10月17日の開催では、大学院生から「住民の方は、住宅や地域に愛着があるように感じた」「親しみ

やすく、明るい感じで、話好きである」「何をどのように相談してよいか、わからない様子であった」などの感想があった。

次回に向けて、事前に保健室開設の意義を簡潔に伝えられるように広報活動を工夫する。閉じこもりがちな住民への呼びかけや参加人数に対応できるよう保健室側の人数や空間の使い方等を検討する。保健師、看護師としてできることを伝えられるよう工夫する（希望に合わせて健康相談を受ける）。開設時期に合わせた飲み物やお菓子を準備しても良いのではないかなどが挙げられた。

今後、本活動を継続的な事業活動にするためには、教員や学部生、大学院生の協力や連携が必要である。



交流の様子



ミニレクチャー「風邪予防のポイント」

## B. 災害看護部門委員会

### 1. 武蔵野地域防災活動

#### a. 趣旨

武蔵野地域防災活動は、本学前身の日本赤十字武蔵野短期大学時代の平成16年より始まった。地域の人々とともに身近な防災の知恵と技を獲得し、災害に強い人材を育成することを狙いとし、令和元年度で17年目である。

武蔵野キャンパスを中心に武蔵野市民防災協会、行政と協働し、防災ボランティアセミナーを開催してきたが、本年度はセミナー企画として母子のニーズにも注目してセミナー内容に盛り込み、年間10回（令和元年10月～令和2年2月）の「武蔵野地域防災セミナー」（表1）を開講した。昨年同様、武蔵野市役所で開催した。



#### b. 活動内容

セミナー開催に伴う運営経費は、本学と武蔵野市が半々に拠出している。地域防災活動のメンバーは、本学教職員、地域の自主防災組織所属の住民、赤十字社員、企業員、他大学教員、近隣の病院所属の看護師と多岐にわたる。



更に本学の学生災害救護ボランティアサークル（SKV）がメンバーとして一緒に企画運営に加わり、参加者のファシリテーターとして機能していることが特徴である。本学学生は、地域住民と共にディスカッションやシミュレーションを通して交流しながら、地域防災について学ぶことができる。学内では得られない住民との交流を通しての学びは意義が大きい。

各回の参加者数は30～50名と幅があるが、令和元年度の全10回のセミナー参加者は延べ322名であった。

#### c. 来年度の課題と展望

17年間にわたる武蔵野地域防災セミナーでは、「官」「民」「学」が一体となって地域防災活動に取り組んでいる。首都直下地震、南海トラフ地震などが懸念される昨今、行政のみならず、地域住民にとっても防災対策は喫緊の課題である。

受講者は、武蔵野市内のみならず東京都内、関東、東北、中部圏に拡大していることから、「地域防災セミナー」の果たす役割は大きいといえる。

「地域防災セミナー」で得た知識・技術・態度が日常や地域防災活動等で活用され、災害時の備えとしてさらに熟成されることを期待する。



表1 武蔵野地域防災セミナー

No.	日 時		内 容	講 師
1	令和元年	9:30 ～ 12:30	・ 開講式 ・ 今年度のプログラムの特徴 ・ 緊急避難場所から指定避難所への避難者トリアージ	・ COSMOS 小原真理子 ・ COSMOS 小原真理子
2	10/19 (土)	13:30 ～ 16:30	・ 災害時における学童および乳幼児と母親への対応	・ 日本赤十字看護大学 内木 美恵 大学教員等
3	令和元年	9:30 ～ 12:30	・ クロスロード	・ 日本赤十字看護大学災害救護 ボランティアサークル (SKV)
4	11/9 (土)	13:30 ～ 16:30	・ 武蔵野市の地域特性 ・ 子どもを守る防災 DIG	・ 武蔵野市職員 ・ COSMOS 小原真理子・ 青山真市郎・前田久美子
5	令和元年	9:30 ～ 12:30	・ 我慢しない！避難時のトイレ対策	・ 日本トイレ研究所 加藤 篤
6	12/7 (土)	13:30 ～ 16:30	・ 持病を持つ方の災害時の対策 ・ 在宅避難の備え	・ COSMOS 今野 知穂 ・ COSMOS 青山真市郎
7	令和2年	9:30 ～ 12:30	・ 「ここにはダメです！」から学ぶ避難行動 (仮) ・ お互いさまケア	・ 東京大学生産技術研究所 加藤 孝明 ・ COSMOS 谷岸 悦子
8	1/11 (土)	13:30 ～ 16:30	・ 被災者と支援者を癒す傾聴訓練 ・ あなたの手で伝える「癒し」	・ COSMOS 齋藤 麻子・山下カツエ ・ COSMOS 前田久美子
9	令和2年	9:30 ～ 12:30	・ 災害から家族を守る！My 防災カードを作ろう	・ 日本赤十字看護大学 内木 美恵 大学院生
10	2/15 (土)	13:30 ～ 16:30	・ 災害時にこれだけは知っておきたい安否確認方法	・ 日本赤十字看護大学 内木 美恵 大学院生
11	令和2年	9:30 ～ 12:30	・ 災害時に動物のいのちをどう守る？ ・ 避難所における食品衛生 ・ 口腔ケアで避難生活の健口そして健康を！	・ 岩城 知子 ・ 多摩府中保健所 保健師 ・ 東京医科歯科大学 中久木康一
12	3/14 (土)	13:30 ～ 16:30	・ 基調講演 ・ シンポジウム「被災者から学ぶ防災・減災」(仮) ・ 閉講式	・ 武田 真一 ・ 山崎 博之、齋藤 麻子

## 2. 日赤広尾防災プロジェクト

### a. 趣旨

プロジェクトの目標は、広尾地区の日赤 6 施設（看護大・医療センター・総合福祉センター・乳児院・助産師学校・幹部看護師研修センター）の連携と各施設の防災機能の強化と人材育成、災害時のスムーズな連携を目的とする。さらに行政・医師会・住民組織等を巻き込み、広尾地区における防災連携範囲を広げることであった。

### b. 活動内容

#### (1) プロジェクトメンバー

日本赤十字看護大学（守田・野口・織方・川端・松島・渋澤）；日本赤十字社（武口）；日本赤十字社医療センター（丸山・板垣・佐藤・高木）；総合福祉センター（染谷・岡本・清水）；乳児院（臼井・福澤）；日本赤十字社幹部看護師研修センター（大和田・瀬川・江尻・三好）；渋谷区医師会（高橋・渡辺）；日本赤十字社東京都支部（齊藤）；渋谷区（河野）の 24 名で活動を行った。

#### (2) 活動内容

会議を 5 月 23 日、7 月 18 日、10 月 10 日、12 月 19 日の 4 回、18 時～20 時頃に開催し、上記目標に基づいて活動した。昨年度までは、防災マニュアル班・イベント班に分かれて活動していたが、マニュアル班の活動目標が達成されつつあるため、今年度は一本化して活動することとなった。活動内容は主に下記であった。

#### (3) 地域連携イベント：ニーズに基づき活動を行う（表 1）。

H30 年度に課題であった、地域住民参加型イベントの開催と広尾中学校との協働の実施を中心に取り組んだ。4 件の防災訓練・イベントを実施した。AED・三角巾両方に赤十字講習指導員が指導し、災害救護ボランティアサークルの大学生も協力したことによって、わかりやすく確実な手技の指導が行えた。体育館で大勢の参加者に対して音声伝わりやすい工夫が課題となった。

#### ① 氷川地区防災訓練 11 月 17 日(土) (写真 1・2)

防災訓練は、セミナー・防災教育等で協働したことのある住民・中学生が増え、本プロジェクトに対する認知度も高まってきており、地域住民・中学生との取り組みが定着しつつある。

#### ② 広尾中学校防災授業 (HUG) 12 月 19 日 (木) (写真 3)

広尾中学校での防災授業で HUG を実施した結果、2 年生 80 名のアンケートから高い満足度が得られた。広尾中の敷地図を使用し、実際に避難所となる大体育館で実施したことで、より臨場感のある避難所運営シミュレーションとなった。生徒はもちろん、教諭も災害時の役について活発に議論していた。昨年度より中学で HUG セットを購入し、避難所開設時の開放区域を確認したり、教諭自身もファシリテータを務めるなど徐々に防災教育への関心が醸成されてきている。一方で平日日中のファシリテータ可能なメンバーの確保が課題であった。

#### ③ 渋谷区自主防災組織新会長への地域住民ニーズの確認

防災訓練等のイベントを通じて新会長・副会長にニーズを伺い、出前講座・健康と防災を含む話題で参加型のものを希望されていることが把握できた。今年度は実現できていない。

- ④ 日本赤十字社地域包括ケアサロンでプロジェクト活動をポスター展示  
1月30日(木)・31日(金) 本社職員 55人、本社以外 45人が来場し、DIGへの関心などが寄せられた。

また、今年度までの活動成果発信のために、6月16日(日)に第20回日本赤十字看護学会でポスター発表を行った。50名ほどが来場し、5名ほどから質問を受けた。(写真4)

表1：活動実績

実施日	場所	テーマ等	参加人数
2019年 6月15・16日 10:20-11:20	日本赤十字 看護大学 211講義室 (写真4)	第20回日本赤十字看護学会一般演題(示説発表) ・日赤広尾地区防災プロジェクトの活動報告 パート1 代表者：大和田，共同発表者：板垣・臼井・岡本・近藤・武口・高橋・石田・守田・洪澤 ・日赤広尾地区防災プロジェクトの活動報告 パート2 代表者：亀井，共同発表者：高木・清水・由比・瀬川・江尻・大西・高橋・織方	506名 (プロジェクトから9名参加)
2019年 11月17日(日) 8:30-12:00	渋谷区立 広尾中学校 (写真1・2)	渋谷氷川地区合同防災訓練 ①三角巾を使った止血法や固定法訓練 ②AED・心肺蘇生訓練	479名 (プロジェクトから37名参加)
2019年 12月19日 (木) 13:35-15:25	渋谷区立 広尾中学校 (写真3)	渋谷区立広尾中学校防災教育中学2年生対象 HUG	80名 (プロジェクトから8名参加)
2020年 1月30日 (木) 10:00-17:00・ 31日(金) 10:00-16:00	日本赤十字 社	日本赤十字社地域包括ケアサロンで活動ポスター発表	100名 (プロジェクトから1名参加)

### c. 来年度の課題と展望

#### 「地域連携イベント：ニーズに基づき活動を行う」の課題と展望

防災訓練の課題は、大勢の参加者に対して音声伝わりやすい工夫が必要である。

広尾中学校防災教育との協働における課題は、平日日中のファシリテータの確保と今後の長期的な協働のあり方の検討である。

渋谷区地域住民ニーズの確認の課題は、新会長・副会長から「出前講座・健康と防災を含む話題」について具体的に実現を目指す必要性がある。



写真1 : 11/19 氷川地区防災訓練(三角巾)



写真2 : 11/19 氷川地区防災訓練(AED)



写真3 : 12/19 広尾中学校防災教育

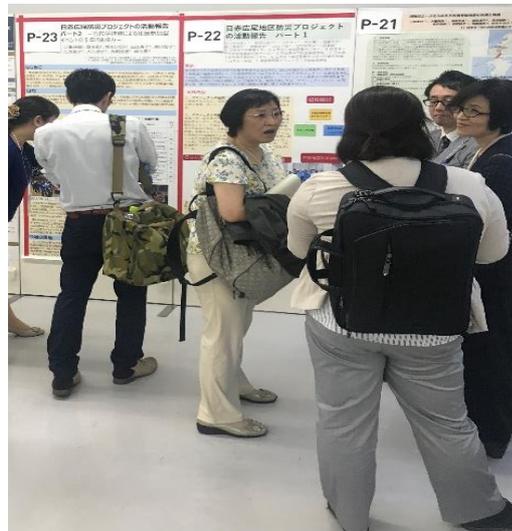


写真4 : 6/16 日本赤十字看護学会で成果発表



表 1 2019 年 4 月～2020 年 3 月までの調査

戸数 (戸)				人数 (人)			
訪問	電話	復興住宅	調査合計	訪問	電話	復興住宅	調査合計
286	600	161	1,047	363	600	163	1,126

表 2 2019 年 4 月～2020 年 3 月までの健康課題別訪問者数

種別	人数	種別	人数
1. 高齢者	334	8. 感染症	0
2. 乳幼児・児童 (小児)	9	9. 成人	151
3. 妊産婦	2	10. その他	1
4. 身体障がい	8	11. その他 (心のケア関係)	17
5. 知的障がい	0	12. 栄養・食生活	0
6. 精神障がい	0	13. 歯科・口腔	0
7. 生活習慣病	2	延人数 (人)	524

### (3) 災害看護に関する実習

本学の災害看護専門看護師 (CNS) コースの学生 4 名 (修士 1 年 2 名、2 年 2 名) が 9 月から 10 月にかけて、10 日程度実習を行った。日赤なみえ保健室での家庭訪問、電話訪問、その他に浪江町の住民健診での問診などを実施した。保健室で実習報告会を行い、保健師、看護師は活動の意味を再度問い直す機会となっていた。

#### c. 来年度の課題と展望

避難指示解除準備区域及び居住制限区域については、平成 29 年 3 月 1 日に避難指示が解除され、4 月より浪江町の帰還困難地域以外の帰還が可能となった。これにより、浪江町は役場を二本松市から浪江町に移した。また、仮設・借上げ住宅の供与期間が令和 2 年 3 月末まで終了する。これに伴い、住所を決定していく住民が多くなることも予測される。福島県の復興に関するロードマップは発災から 10 年であり、2 年後が一応のゴールである。本事業に関しても、次年度から事業資金が 10%減額することとしており、浪江町に移行できるような、事業にするよう検討していく。

## 4. 和歌山県湯浅町学校防災プロジェクト

### a. 趣旨

2018 年 9 月、日本赤十字看護大学は早稲田大学人間科学学術院と共に、和歌山県湯浅町との学校防災プロジェクトに関する協定を締結した。この協定は「学校防災プロジェクト」として防災教育プログラムの開発を実施することに関し、教育活動や研究、学生交流などの各分野において相互に連携および協力することを目的としている。本学においては、大学院及び学部学生と教員が、小中学校向けの防災教育プログラムを開発する方向で活動が開始された。

## b. 活動内容

### (1) 現状説明

本年度も、「湯浅町 防災フェスタ 2019 (9月7日(土)～8日(日))」に参加。昨年に引き続き、早稲田大学の学部生・大学院生との交流を通して、学際的な視点を持つ機会となった。本学の参加者は、DNGL 教員 2 名・DNGL1～4 年生 4 名・SKV 学生 12 名 (SKV 参加は本年度から) であった。早稲田大学からは、教員 1 名、学部生・大学院生 12 名であった。

本学は①三角巾を使った応急手当②心肺蘇生③避難所運営ゲーム④山田町での津波支援経験に関するポスター展示を実施した。早稲田大学は、災害に関する絵本の読み聞かせ、バーチャル体験などを行った。実施後、早稲田大学と本学学生間で振り返り学習を主体的に行った。

その後、湯浅中学校教員及び湯浅町教育委員会から湯浅中学 1 年生を対象とした災害看護に関する講義依頼を受け、2020 年 1 月 28 日に湯浅中学校で「災害時に中学生が出来ること～みんなと生き抜くために～」をテーマとした出張講義 (講義・机上シミュレーション [GW]・演習) を実施した (9 時～12 時 40 分) を行った。

### (2) 点検・評価

「湯浅町 防災フェスタ 2019 (9月7日(土)～6日(日))」への参加では、特に、湯浅中学 1 年生 (約 90 名) を対象とした避難所運営ゲームで、受講する生徒や住民などの対象に合わせて SKV や DNGL 学生は工夫して運営をしていた。

1 月 28 日の出張講義では、居眠りする学生もなく、講義・机上シミュレーション (GW)・演習 (体を動かしながら) に、学生が主体的に臨んでいた。湯浅中学校の先生方の全面的な協力があり、事前打ち合わせを十分に行いながら先生方との関係性を構築しながら本番を迎えたからこそその成果であった。後日、中学より送られた生徒の感想集の内容から、私たちが伝えなかったメッセージを確かに受け取っていることが分かり有意義な講義であった。この講義には、和歌山県教育委員会の方や教育新聞社の方が視察された。学校防災教育としてユニークな方法であると高く評価された。資料提供を依頼され応じた。

## c. 来年度の課題と展望

湯浅町・教育委員会、早稲田大学人間科学学術院、本学の協定書を締結して 3 年目になる。よい関係性を構築できている。2020 年度は、湯浅町・教育委員会が主体の年次計画に沿う形で、さらに 3 者での事前準備をして、より連携を発展させる。

### ①毎年恒例の「湯浅町 防災フェスタ」への参加の検討

大規模な防災フェスタは隔年での実施のため、2020 年度は湯浅町教育委員会が主催の防災企画となると考え、事前打ち合わせを充実させて学生・教員が参加する。

### ②湯浅中学校出張講義第 2 弾の検討

湯浅中学校では 1 年生に対して毎年総合学習の時間で防災教育を行っている。2020 年度の授業計画に沿って、協力要請に応じていく。

## C. 継続教育部門委員会

### 1. フロンティアセミナー部会（2019年度より認定スキルアップセミナー部会と統合）

#### a. フロンティアセミナーの趣旨

本部会は、年1回開催しているフロンティアセミナーの企画、運営を担当する部会で、教員3名（本年度のみ、年度途中より1名過員し4名）と事務職員1名により構成されていた。2019年度より、認定看護師のためのスキルアップセミナーを企画、運営している認定スキルアップセミナーと統合したセミナー部会として新たに発足し、部会を構成するのは教員5名、事務職員1名である。

フロンティアセミナーは、看護大学・大学院が持つ教育的機能を活用した人材育成の提案、大学と病院の協働、臨床実践能力の向上にむけたプログラムの提供など、看護におけるタイムリーな内容を発信、提起する場として、2006（平成18）年度より年1回開催してきた（初年度である2006年度のみ3回開催）。本セミナーは、日本赤十字看護大学同窓会から支援をうけていた（2018年度にて終了）が、対象者を本学卒業生・修了生に限ることなく、希望者は誰でも受講可能としている。

#### b. フロンティアセミナー活動内容

本年度は、臨床で初めて看護研究に取り組む看護師たちを対象とした研究初心者向けの内容のセミナー「チャレンジ！看護研究 ～はじめの一步～」を企画し、2019年11月2日（13:00～17:00）に開催した。本年度の受講者数は、総数95名であった。なお、過去5年間の受講者数を、表1に示している。

本年度は、講演Ⅰ、Ⅱの二部構成で実施した。講演Ⅰは「日頃の疑問から研究テーマへ」と題して、本学教授太田喜久子先生に、日頃の臨床での疑問、関心事をどのようにして研究疑問、そして研究テーマへと発展させるのかを、事例を交えながらご講義いただいた。講演Ⅱでは本学名誉教授筒井真優美先生に「実践家の強みをいかすアクションリサーチ ～人々とともに、人々のためにある研究方法～」をテーマとして、アクションリサーチについて、受講者との対話を交えながら丁寧にご講義いただいた。

受講者からは「今日学んだことを持ち帰り、今後の臨床に場で活かしたい」「日々仕事をしている中で忘れていってしまう疑問をリサーチクエストとして形にして取り組む決意ができた」「アクションリサーチについてあまり知らなかったが、臨床でアクションリサーチの手法を用いて研究してみたいと思った」などの感想がアンケート用紙への自由記載に多数寄せられ、臨床での看護研究について考え、取り組んでみたいという意欲をかき立てるセミナーになったと評価できる。

表1：過去5年間のフロンティアセミナー受講者数推移

年度	2015（平成27）	2016（平成28）	2017（平成29）	2018（平成30）	2019（平成31）
受講者数	70	216	45	234	95



### 【講演終了後の交流会】

講演終了後には、セミナー受講者を対象として、ご講義いただいた太田喜久子先生、筒井真優美先生を囲み、看護研究について語り合う交流会を開催した。1時間という短い時間ではあったが、18名の参加者とともに、講演の感想や現在、臨床で取り組もうとしている看護研究のことなどについてディスカッションをおこなう有意義な時間となった。



### c. 来年度の課題と展望

2019年～2020年度は臨床の看護職者を対象として「看護研究」を継続テーマとして企画、運営する予定である。2020年度のフロンティアセミナーは「量的研究」を取り扱う内容のセミナーを、2020年11月7日に開催予定である。2020年4月以降、本セミナー開催に向けた準備を行っていく必要がある。併せて、2021年度以降のセミナーのテーマの企画立案を行う。

今後の展望として、地域連携フロンティアセンターが実施している他のプログラム（例えば、実習指導者研修会、ホームカミング・デー等）とのコラボレーションなど、より効果的で効率的なセミナーの運営に向けて、様々な模索を引き続き検討していくことも重要である。

## 2. 認定スキルアップセミナー

### a. 趣旨

年に1回開催している「認定看護師のためのスキルアップセミナー」（以下、認定看護師セミナー）の企画及び運営は、教員4名と事務職員1名により構成されていた「認定看護師セミナー部会」が担当していた。2019年度より、フロンティアセミナー部会と統合されたセミナー部会として新たに発足した。部会を構成するのは教員5名、事務職員1名である。

認定看護師セミナーは、本学地域連携・フロンティアセンターが開講していた認定看護師教育課程（2014年より休止中）の修了生のフォローアップを目的として、2015（平成27）年度より開催されている。当初は、「糖尿病看護」「慢性呼吸器疾患看護」「認知症看護」の3コースに限定したプログラムであったが、本学の教育課程修了生に限定せず、受講希望者全てを受け入れてきた。2017（平成29）年度からは、認定看護師の全領域コースの修了生に対応できるプログラムを工夫し、門戸を広く開放している。

### b. 活動内容

本年度は、2020年2月29日に認定看護師セミナーの開催を予定していたが、新型コロナウイルスの感染拡大が懸念された状況にあったため、2月17日に「2月29日の開催を見合わせ、同年10月10日に延期し開催する」旨を決定した。同日中に本学ホームページにて告知し、さらに受講予定者への個別連絡を迅速に開始し、受講費の返金作業を円滑に進めた。セミナーを中止ではなく延期としたのは、受講希望者の認定看護師更新にむけたポイント獲得に不利益をきたさないための配慮からである。

### c. 来年度の課題と展望

2020年度は、本来は1年に1回の開催である認定看護師セミナーを2回開催する予定である。これは、本年度開催できなかった認定看護師セミナーを2020年10月10日に開催するとともに、従来から開講している2月に受講すべく勤務日程等を調整している受講生がいることにも配慮し、従来通りの2月期（2021年2月27日を予定）も開催する。2020年度の課題として、2回のセミナーを円滑に運営す

るための周到な準備、広報活動と、次年度（2021年度）のセミナーの企画立案を行っていくことが求められる。また、今後の展望としては、認定看護師に関する日本看護協会や厚生労働省の動向、様々な高度実践看護師に関する位置づけや特定医師研修などの看護に関する社会情勢も見据えつつ、本セミナーの今後の展開について、タイムリーな検討を重ねていくことが必要不可欠である。

### 3. 実習指導者研修会

#### a. 目的

- （1）本学での看護学教育における実習の意義および実習指導者としての役割を理解し、効果的な実習指導につなげる。
- （2）大学教員や自施設以外の実習指導者との情報交換の場とし、看護者としての視野を広げ自己成長の機会とする。
- （3）実習での「ケアし、ケアされる」という体験を通して、学生が4年間にわたり成長していけるような指導体積を構築する。

#### b. 運営の基本方針

- （1）本学と実習施設が協働し、企画運営を行う。
- （2）受講生が、本学教員や自施設以外に勤務する受講生と情報交換できる場を提供する。
- （3）受講生が‘人を育てる’観を育める場を提供する。
- （4）受講生には、研修修了時に「日本赤十字看護大学 実習指導者研修会 修了証」を発行する。

#### c. 活動内容

##### （1）企画および運営

本研修会は、本センターの研修部門に位置付く実習指導者研修部会を構成する教員15名（学内企画委員）が中心となり、学外企画委員として日本赤十字社医療センター、武蔵野赤十字病院、大森赤十字病院、葛飾赤十字産院、横浜市立みなと赤十字病院に所属する看護職者（各施設1名、合計5名）と協働で開催した。

令和元年度は実習指導者研修部会の学内・学外企画会議3回を開催し、内容の充実を求め企画・運営を行った。事務作業については、地域連携・フロンティアセンターを担当する本学事務職員が、様々な作業を担い、研修会の円滑な運営を支援した。

今年度の実習指導者研修会は、例年同様に開催期間は6月～1月とし、開催回数は5回、研修会の構成は実習指導に関する理論・演習・リフレクションとした。

今年度は、昨年度の内容を一変更した。以下の点が変更している内容および企画である。

- ・3回目の看護倫理—実習指導を通して伝える看護—は前任の高田早苗先生から、吉田みつ子先生にご担当頂き、演習を交えた内容に変更した。
- ・4回目の安部陽子先生「医療・看護の動向と実習」、川原由佳里先生の「看護理論」を新たな講義内容として新設した。

(2) 実習指導者研修会プログラム

開催月日	時間	プログラムの内容	講師
2019年 6月26日 (水)  受付開始: 8:30	9:10-9:30	開講式／オリエンテーション	
	9:30-10:30	教育課程と実習の位置づけ 教育カリキュラムと実習の位置づけ	企画委員
	10:40-12:10	実習指導概論 実習指導の展開と実習指導者の役割、実習指導の過程・方法	佐々木幾美先生 本学 教授
	13:20-15:50	教育方法 ー状況に埋め込まれた学習ー 状況の学習論、正統的周辺参加論	有元典文先生 横浜国立大学 教授
	16:00-16:20	オリエンテーション	
8月8日 (木)  受付開始: 9:00 ガイダンス 9:20	9:30-10:50	リフレクションの概念	佐々木幾美先生 本学 教授
	11:00-12:30	対人関係論ープロセスレコードを用いてー	小宮敬子先生 本学 教授
	13:30-15:00	教育心理 ー学習者の心理ー 人間の発達、学習過程における心理、学生の特性	遠藤公久先生 本学 教授
	15:10-16:40	実習指導の実際① (演習 I -1) Group Work にて、実習指導案を作成する	企画委員 実習担当教員
8月9日 (金)  受付開始: 9:00 ガイダンス 9:20	9:30-12:10	看護倫理ー実習指導を通して伝える看護ー 看護と倫理、実習指導と倫理	吉田みつ子先生 本学 教授
	13:00-14:30	教育原理 ー教育原理と実習指導ー 教育の意義、目的、教育活動の特性、人を育てる(教育)観	望月厚志先生 茨城大学 教授
	14:40-16:40	実習指導の実際② (演習 I -2) Group Work にて、実習指導案を作成する	企画委員 実習担当教員
8月～11月	<p align="center"><b>実習指導に関する実習 (実習指導案を用いた展開)</b></p> <p align="center">*申し込みをされた方は、<b>他施設にて実習指導の見学 (オプション1)</b> <b>看護技術演習見学 (オプション2)</b></p> <p align="center">※オプション3 (予定): ワトソン看護理論と実践への応用 (仮) 9/19 (木) ※オプション4 (予定): フロンティアセミナー (看護研究) 11/2 (土)</p>		
11月26日 (火)  受付開始: 9:00 ガイダンス 9:20	9:30-10:30	実習指導者としての目標と結果・評価 Group Work にて、実習指導についての振り返りを共有する	企画委員 実習担当教員
	10:40-12:00	医療・看護の動向と実習	安部陽子先生 本学 教授
	13:00-14:30	看護理論 看護の概念、看護の知と実習指導	川原由佳里先生 本学 教授
	14:40-16:10	実習指導の実践	企画委員 実習施設委員

2020年 1月28日 (火)	10:00-12:00	<b>実習指導の実際③</b> （演習Ⅱ） Group Work にて、立案した実習指導案を用いて振り返りを行い、 実際の実習指導で得た学びを深める	企画委員 実習担当教員
受付開始: 9:30	13:00-15:00	<b>実習指導の体験を語り合う：全体のまとめから課題への具体的チャレンジ</b> 実習指導体験の共有、学びや課題の深化、具体的チャレンジに関するディスカッション	
ガイダンス 9:50	15:40-16:10	<b>修了式・閉講式</b>	

### （3）受講者の構成と受講者数

本学の実習指導を担っている病産院・高齢者施設に勤務する看護職者とそれ以外の病院に勤務する看護職者、合計 61 名で研修会を開始した。

### （4）全 5 回の研修会の概要とアンケート結果

#### ■第 1 回：令和元年 6 月 26 日（水）

開校式に続き、①教育課程と実習の位置づけ ①実習指導概論 ③教育方法についての講義が行われた。

- ①教育過程と実習の位置づけ：本学が教育理念と教育目標をもとに、講義・演習・実習の有機的な結びつきに取り組んでいること、各学年で体験する実習での反応そして実習指導者と大学教員の連携の重要性について説明した。アンケート結果でもよかった 69.0%、とてもよかった 26.2%であった。実習指導者として、教育側の視点を知ることができた、最近の学生の教育内容や各学年の課題が知れてよかったなどの意見があった。
- ②実習指導概論：「実習指導概論」は、具体的な事例をたくさん用い、とても理解しやすい講義内容であった。護学実習は意味形成の場であり、「立ち止まって考える」、「振り返る」という意識化の過程が重要であること、授業と実習を支えるために、教育環境づくりが重要であること、学生を理解し、指導内容を合わせていくことが重要であることを学んだ。そして、学生の学びを支援するための方策について、具体的に、詳細な事例を用いながらわかりやすく講義していただいた。具体的な事例を用いることで、受講生は学生の置かれた状況を想像したり、これまでの実習指導場面を思い起こし、照らし合わせながら理解を進めることができたのではないかと思われる。本講義は研修初日に設定され、本講義前後の講義ともつながり理解しやすい流れとなっている。学生を理解し、臨床の場を振り返りながら実習の意義や実習指導者の役割について考えることで、本研修における学習意欲の向上にもつながったのではないかと思われる。アンケート結果でも、とても良かった 34.9%、良かった 65.1%であった。具体的な事例を交えての講義が大変好評であり、実習指導に役立てられるコメントが多かった。
- ③教育方法・状況に埋め込まれた学習：講義目的は、「『誰もが一緒に発達しあう実習指導』とは？学習者体験を通して皆で検討しよう」であった。講義型ではなく、アイスブレイクやロールプレイ等を取り入れ、参加体験型の学習手法をとっていた。これにより、学習者としての体験を通し、学習者である学生の思いを「感じる」ことができ、自己の指導観への「気づき」を得ることができていた。また、指導とは、「学習環境をデザイン」することであり、学習者が「できないまましてみよう」と思える、できる場を提供することであり、そこに発生するリスクを減らす必要性を強調されていた。今できていることは全て、「できいまましてみる」瞬間を経て、過去に獲得したものであることを認識することができたと考えられる。午後の講義枠であったが、研修生が笑いながら生き生きとした表情で学習していた姿が印象的であった。このように、いきいきと、主体的に学べる学習環境を提供することの重要性を、体験を通して学ぶことができたと考えられ、非常に有意義な学習になったと考え

られる。アンケート結果もとても良かった 65.1%、良かった 34.9%であり、「学習者の緊張感を体験することができ、自身の指導を振り返ろうと思った」「自分が指導される立場を体験することで、声かけや関わり方で大きく場を変化させていくことが可能になると感じた」などの感想が書かれていた。

## ■第2回：令和元年8月8日（木）

8月8日は、①リフレクションの概念、②対人関係論、③教育心理、実習指導の実際①（演習I-1）と実習指導の具体的な内容であった。

- ①リフレクションの概念：「リフレクション」について日本赤十字看護大学佐々木幾美先生より講義を受けた。講義の内容は、リフレクションの概要と特徴としてリフレクションの概念やリフレクションの方法について、実習という経験からの学びを深める材料としてリフレクションをどのように取り入れていくかについて事例などを交えながら講義が行われた。まずは、自分自身のリフレクションを行い、Gibbsのリフレクティブサイクルを活用しながら自分の看護を意味づけしていくことの重要さと、さらにリフレクションを取り入れ学生指導を行なう際、学習者のみならず指導者もともに学びが深まることであり、学生の語りや学びをより促すような方法など具体的な講義であった。臨床現場で学生の語りを傾聴、共感、承認してくことは大切であるが、指導者にあたる看護スタッフには方法が十分理解されていない場合もあるため、研修参加者が現場に浸透させ、よりよい指導につながる講義となった。アンケート結果もとても良かった 58.3%、良かった 41.6%であった。「なんとなくリフレクションという言葉を使っていたが、今回の講義で改めて意味を知り、今後の関わりに生かしていきたい」、「感情の気づきがとても大切だとわかり、学生さんへの声のかけ方など工夫していきたい」などの感想があった。
- ②対人関係論—プロセスレコードを用いて—：日本赤十字看護大学の小宮敬子教授から講義を受けた。学生の生の声を用いた実際の事例や研究でのインタビューから、実習指導における学生の特徴や学生の望む実習指導等について学んだ。実習では、臨床に出て働く今後を見据え、対人関係上の力をつけることが重要であることが強調された。また、3人の理論家によるプロセスレコードが例示され、それぞれの看護場面を読み解くポイントの解説があり、その後に参加者同士の話し合いがあったことで、より講義内容の理解が進んでいた様子が見えた。途中で体調不良の参加者がおり一時的に講義が中断したが、参加者の迅速な協力と小宮教授の対応により、講義は滞りなく終了した。アンケート結果でもとても良かった 45.8%、良かった 52.0%であった。「素直な気持ちを共感しつつ、看護を考えることができた」「看護師の素直な感情から得られるもの、気付かされるものが沢山あり、良い勉強になった」などの感想があった。
- ③教育心理—学習者の心理—：日本赤十字看護大学 教授 遠藤公久先生により、教育心理-学習者の心理-人間の発達、学習過程における心理、学生の特徴についてご講義頂いた。講義内容は、現代青年の特徴として、青年期の特性と悩み、不安、青年を取り巻く社会的背景と特徴と、学習過程の心理として、意欲と個性についてであった。看護学生の成長発達過程を踏まえ、彼らがどのような状況におかれているのかを理解をした上で関わっていく必要があることを繰り返し伝えられていた。そして、学習過程においては、有効な動機づけや、意欲を高めるような働きかけが必要であるとのことであった。講義資料については、配布資料と研修時のスライドに相違や、順番が違うものがあり、研修生が戸惑っている様子が見えた。アンケート結果でもとても良かった 27.0%、よかった 60.4%、どちらでもない 10.4%であった。「学生のできることや強みを活かす大切さを改めて学んだ」などの感想があった。
- ④実習指導の実際①（演習I-1）：前半講義形式、後半グループ演習を実施し、翌日の演習にむけた導入的内容であった。前半講義では企画委員である中村滋子先生より、実習指導案についての講義を受けた。まず、看護学実習における教材と教材化について学び、看護学実習における学生の学びを

促進する実習指導者としての役割について学んだ。そして、実習指導案の意義と特徴について学び、事例を用いながら実習指導案の作成について学びを深めていった。後半はグループに分かれて、自己紹介と各施設の実習受け入れ等に関する情報共有を行った。実習指導案に関する知識の確認、習得、及びお互いを知る時間を持てたことで、翌日の実習指導案作成の演習に向けた準備状態を作ることができ、翌日の演習において活発なディスカッションをすることができていた。アンケート結果は、とても良かった47.9%、よかった39.5%、どちらでもない4.1%であった。「いろいろな病院の実習指導の実際を知ることができた」「他施設の状況がわかった」など、交流を交えて、今後の実習指導案の作成に向けて、準備できた様子であった。

### ■第3回：令和元年8月9日（金）

8月9日は①看護倫理、②教育原理、③実習指導の実際②（演習I-②）の講義と演習の構成であった。

- ①看護倫理—実習指導を通して伝える看護—：日本赤十字看護大学の吉田みつ子教授より講義・演習が行われた。講義では、吉田教授が執筆された「実習指導を通して伝える看護」でも紹介されている「身体抑制」に関する学生のエピソードが紹介された。学生が倫理的な問題のある場面で経験し、学生は知識と経験的学習を積み重ねることで、実践の中から善の概念を発達させていくこと、看護に対する責任を自覚することで、学生の学びが変わっていくことが説明された。実習指導を通して、看護の価値・意味を発見できるように学生に関わることが重要であり、正解を求めるような構図ではなく、学生と一緒に考えるような機会にしていくことが大切であることが伝えられた。後半のグループワークを通して研修生は、普段の看護ケアを振り返るとともに、実習指導を通して、看護の大切や意味を伝えていくことが重要であることに気がつくことにつながっていた。アンケート結果は、とても良かった56.2%、良かった41.6%であった。「事例が多くとてもわかりやすかった」「学生指導を考える中で看護の楽しさを感じている自分を思い出すことができた」などの感想が寄せられた。
- ②教育原理—教育原理と実習指導—：茨城大学 特任教授の望月厚志先生より講義があった。初めに日本の教育の現状についてDVDを視聴し現在の日本社会における教育の本質的な問題を考えた。その後「84歳の小学生」の映画のストーリーを基に、世界の学びの基本は生涯学習である、というテーマを導いた。またディズニーのわんわん物語の一つのシーンと映画「家裁の人」に出てくる裁判官の言葉を対比しながら、教育の意義、本質的な目的を例示した題材の中から解説された。教育原理とその歴史的発展については、経験と教育、アンドラゴジーやペダゴジーのバランスやリンデマンの言葉を等から概説された。最後にこれら教育原理と看護教育について、「奇跡の人-マリーとマルグレット」の中で視聴覚障害の少女にどのように「死」を理解させるのかという話から、教育とは何なのか、教育は生活であり生涯学習であるといった重要なテーマを示された。様々な題材からテーマを導き出す展開で内容も大変充実していた。一時間半では網羅すること難しい量を準備頂き、割愛される部分が多かったことから、次回は、同内容の講義を3時間をお願いするほうが、より学習効果のある講義になるかと思われる。受講生の中で、教育原理で扱われた理論自体を知らない場合、なじみのない単語が多く出てくることから、少し難易度が高いと感じた方もいたのではないかと推察される。アンケート結果は、とても良かった31.2%、良かった45.8%、どちらでもない20.8%であった。「難しい中でも動画もあったのでわかりやすかった」「教育の根本が考えられた」「内容が盛りだくさんでしたが、先生が伝えたかったことのエッセンスは理解できた」などの感想があった。
- ③実習指導の実際②（演習I-②）：専門領域別に、4～7名のグループに分かれ、事例をもとに実習指導案における週案あるいは日案の作成に取り組んだ。また、各グループに学内・学外企画委員と実習担当教員がファシリテーターとして参加した。事例を通して実習中の学生の様子や反応

をファシリテーターから聞きながら、指導方法について話し合い、指導案作成のポイントを学ぶことができたと考える。成人・基礎の領域の事例がレベルⅡの5週間に及ぶ実習であり、本学の実習病院以外の参加者には、5週間の実習の具体的内容に関する理解が難しい、日案の記録用紙にレディネスという文言が初めて出てくるため、戸惑ったとの意見があった。レベルⅡ実習の実際の実習内容を説明できる資料の準備を検討する必要があると考えられた。アンケート結果は、とても良かった60.4%、良かった31.2%であった。「ファシリテーターが導いてくださり、わかりやすかった」「グループメンバーと意見を積極的に交わすことができ指導案の作成ポイントがわかった」などの感想があった。

#### ■第4回：令和元年年11月26日（火）

8月以降は、実際に指導案を立案して実習指導に取り組む状況になっている。そのため、11月の本講習会では「実習指導者としての目標と結果・評価」「実習指導実践」の2つの演習と、今年度からの新たな講義である「医療・看護の動向と実習」「看護理論」を企画した。

- ①「実習指導者としての目標と結果・評価」および「実習指導の実践」：8月の研修後より、各施設において実習指導者として目標を立て学生と関わり、その結果と評価を持参してのグループワークとした。演習を通して、研修生は、実習指導者としての目標を立て、自身の指導場面を振り返り、気づきと課題を抽出できていた。それらの課題やグループメンバーからのフィードバックを基に、自施設にて実習指導案の作成と実践を行った。アンケート結果は、とてもよかった51.7%、よかった43.1%であった。「他の人の体験や意見を聞くことができた」「自分だけでなく他の指導者の悩みや気づきを聞いたり、自分の体験に対して新たな発見もできた」などの感想があった。以前の講義内容も振り返りながら、グループワークでの学びが深まっていた。
- ②医療・看護の動向と実習：日本赤十字看護大学 教授 安部陽子先生により、医療・看護の動向と実習についてご講義頂いた。講義内容は、社会保障改革の方向性、看護基礎教育の方向性、実習指導の方向性であった。社会保障制度の改革の中で、少子化対策と医療についての影響が示された。少子化対策に関連して、働く女性が増加し、看護師の年齢階級の変化が示された。次に、医療については、国民医療費の対GDP比の上昇等に伴う社会保障の改革が行われるなかで、医療の在り方が検討され病床機能改革等が進められていることが示された。そのような社会情勢の変化の中で看護師に求められる役割の変化や期待が示され、実習指導の方向性についてご講義頂いた。参加者は、臨床の現場の中で国の動向を意識することは少なく、興味深く講義を聴いていた。アンケート結果は、とても良かった37.9%、よかった50.0%、どちらでもない8.6%であった。「社会状況の動向とともに実習生の特徴を知ることができた」「現在の社会の動きの中での看護分野を知ることができた」などの感想があった。社会動向の中での看護、さらにこれらの状況がどのように実習指導につながるのかを理解していた様子であった。
- ③看護理論—看護の概念、看護の知と実習指導：看護理論については、日本赤十字看護大学の川原由佳里教授から講義をいただいた。先生自身も言うておられたように、学生時代には看護理論は難しく自分に関係のないものと思いがちであるが、「患者に何もしてあげられないことがない」と自身のない学生に対し、看護の現象を照らし出す地図や解釈を示す視座として、患者の言動の意味や自分自身を含めた環境が与える影響などを理解する手助けをする役割があることを認識できた。また、何もできていないと思いつている学生の行動が看護ケアそのものであると、その価値を示すことができる役割も担っていることを認識できた。代表的な理論家の理論を、川原先生の関わった実際の実習指導場面に結び付けてお話しくださり、受講生自身も学生時代に避けがちであった看護理論を身近に感じることができ、先生のメッセージにあるように、自分の中の「看護とはの種」を確認するために、「たまに看護理論を訪れて」みようと思える講義であった。アンケート結果は、とても良かった39.6%、良かった51.7%であった。「看護理論は難しいと考えていたが、具体例

をもとにした説明があり、とてもわかりやすかった」「難しかったが理論を知り、自分自身の体験などを振り返ることができた」などの感想があった。看護とは何かという理論の講義を通して、実習の体験や場面を通して学生に伝えられるようにしていくことが必要だということを学んでいる様子であった。

#### ■第5回：令和2年1月28日（火）

最終回では、「実習指導の実際③（演習Ⅱ）」と「実習指導の体験を語り合う」の2つの演習による実習指導の総まとめが行われた。自分の指導実践をワークシートを用いて振り返り、今後指導者としてチャレンジしたいことなどをグループメンバーで共有した。講義や演習で得た知識や他者からのアドバイスを生かし、全ての演習で積極的にグループワークに参加できており、相互作用で学びを深めることができていた。自らと自部署の課題を基に指導計画を立案・実践した過程を丁寧に振り返る事で、経験の意味づけができ、明日からの具体的な行動にまで思考を深めることができた。実習指導者として日ごろ感じている疑問や悩みを話し合う場としても活用できており、問題解決や共感の場となっていた。研修生は、今回の研修をきっかけに学生指導をポジティブに捉え、自分自身で抱え込まず先輩や上司とともに実施していくことの大切さを学んでいた。いきいきと目標や明日からのアクションを語る指導者達の表情が印象的であり、今後の活躍を確信できた。アンケート結果は、「実習指導の実際③（演習Ⅱ）」について、とても良かった54.5%、良かった40.0%、どちらでもない3.6%、「実習指導の体験を語り合う」については、とても良かった56.4%、よかった43.6%であった。「指導で悩むことなどを共有することで、悩む場面は自分だけではないことを感じることができた」「指導者はみな環境作りの大切さを考えていたが、アプローチ方法はいろいろあることを学ぶことができた」などの感想があった。

#### d. 来年度の課題と展望

学生の実習における学びの充実と実習指導者への支援を目指し、この実習指導者研修会の開催が5年目となった。最終的に60名の研修生が修了された。昨年度は、台風の上陸に伴い、8月の2日間のプログラムを変更し実施することになったため、今年度は、災害に伴う緊急連絡体制（研修生のメーリングリストの作成）を構築し、研修会を開始した。実際、台風等の研修会の中止等はなかった点は幸いであった。一方で、講義中に体調不良になられた研修生がおり、企画委委員で受診のサポートなどを行った。今後は、研修中の緊急時の対応策も強化していく必要がある。

今年度は、新たな講義科目創設、一部担当者の変更があったが、受講生のアンケート結果からも有意義な内容であったことが伺えた。アンケート結果からも研修時期、研修内容、順序性は無理のない構成であり、適切であると評価できる一方で、グループワークが長いという意見もあり、次年度は開催回数の減少、グループワークの時間配分や内容の重複など、構成を再検討していく必要がある。また、オリンピックイヤーであることから、時間短縮も含めた検討が必要である。アンケートで今後の研修に向けて、e-learningの一部導入についての意見を伺ったところ、賛成30.9%、どちらかといえば賛成30.9%であった。研修生の負担の考慮、学びの効率化を含めて、次年度以降、一部e-learningの導入も検討していく必要が確認できた。今後も受講生のアンケート結果も参考にし、よりニーズを反映した研修会を目指す予定である。

## D. 実践研究部門委員会

### 1. リサーチフェスタ 2019

#### a. 趣旨

赤十字リサーチ・フェスタは、赤十字系列の医療・福祉施設を中心に連携し、研究や教育の質を高め、より良い実践を行っていくことを目指したもので、今回で 7 回目の開催である。昨年度より、参加する施設間の連携を強め、さらに多くの参加者との活発な交流を促進することを目的に、日本赤十字社医療センター研究推進プロジェクトチームとの協働のもと、日本赤十字社医療センター「冬の院内看護研究発表会」の一部と合同開催として実施した。

#### b. 活動内容

令和 2 年 1 月 27 日（月）17 時 30 分～19 時 30 分に日本赤十字看護大学広尾ホールにおいて、赤十字リサーチ・フェスタを開催した。プログラムとしては例年実施している研究ポスター掲示、研究よろず相談、リサーチカフェなどに加え、日本赤十字社医療センター「冬の院内看護研究発表会」参加の口演、ポスター発表（示説）とともに本学で昨年度奨励研究助成、海外研修活動助成を受けた研究も発表を行い、合計 8 演題の研究発表と 24 題のポスター掲示を行った。

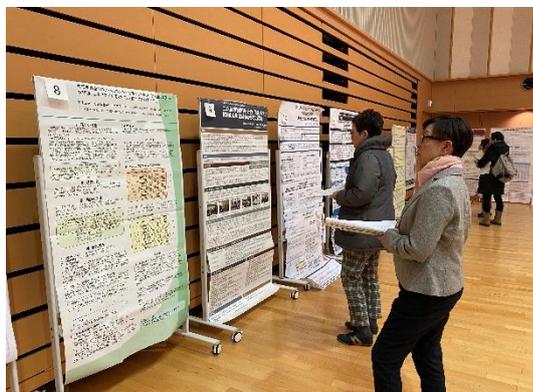
また、今年度は、中根直子看護副部長を講師に迎え「日本赤十字社医療センターの研究倫理審査会の仕組みと看護研究の進め方」をテーマに研究ミニレクチャーを行い、臨床と大学との協働について考える機会となった。

当日の参加者は、日本赤十字社医療センター、日本赤十字看護大学、日本赤十字社幹部看護師研修センターなどから、看護職、教員、大学院生など 71 名であった。

今回は昨年同様に会場内の間仕切りをなくし、「冬の院内看護研究発表会」参加のポスター発表（示説）のエリア、研究ミニレクチャーのエリア、ポスター展示と研究よろず相談・リサーチカフェのエリアと参加者は関心があるところを自由に回ることができるよう工夫した。

#### c. 来年度の課題と展望

今年度は多くのプログラム、研究発表があったことから、研究よろず相談の利用や参加者間の交流がやや少ないこと、全体の参加者がやや減少したことが課題となった。次年度に向けては、プログラムを見直すとともに、広報に努め幅広い参加者を得ていきたい。





## 資料 リサーチ・フェスタ参加者アンケート

### I. 参加状況

- ・総出席者数 71 名  
(日本赤十字看護大学 42 名、日本赤十字社医療センター29 名)
- ・アンケート回収数 7 名/42 名

### II. 参加理由 (複数選択者あり)

- ポスター発表をしたから..... 3 名
- ケアリング・フロンティア広尾活動報告に興味があったから..... 4 名
- 研究ミニレクチャーがあったから..... 1 名
- その他..... 2 名

### III. 参加後の感想

1. 参加して良かった..... そう思う 4 名 ややそう思う 2 名 どちらともいえない 1 名
2. 関心が近い人と交流できた  
..... そう思う 3 名 ややそう思う 1 名 どちらともいえない 3 名
3. 研究へ取り組む意欲が高まった..... そう思う 4 名 ややそう思う 2 名 どちらともいえない 1 名
4. 研究成果を実践で活用したい  
..... そう思う 2 名 ややそう思う 4 名 どちらともいえない 1 名
5. 実践と研究のネットワーク作りのきっかけになった  
..... そう思う 1 名 ややそう思う 3 名 どちらともいえない 2 名 そうは思わない 1 名
6. 会場のレイアウトはよかった  
..... そう思う 3 名 ややそう思う 3 名 どちらともいえない 1 名

### IV. 自由記載欄

- ・大学と連携したと連携で、看護研究が活発で素晴らしいと思いました。こういう職場になるようにどうゆう風に活動したらよいか、ヒントを得るために参加しました。よりよい研究になるように助言を得られることが院内で看護研究を進めていく要因になると学ぶことができました。
- ・ミニレクチャーは時間内でお願いしたいです。
- ・大変なご準備をして下さり、ありがとうございました。ポスター掲示をさせていただきました。他領域の先生方に自分の研究を知っていただく機会となり、ご助言をいただき大変勉強になりました。授業や実習で慌ただしい年月を過ごしている中、このような研究に関するディスカッションの場を提供していただき、大変有意義な時間を過ごせ感謝しております。

## E. ケアリング・フロンティア広尾プロジェクト

### a. 赤十字リサーチ・フェスタ

年度	2019（令和元）年度 報告書
リーダー	新田 真弓
メンバー	住谷 ゆかり、塚本 恵弥、藤田 恵理子、小暮 カオル 日本赤十字社医療センター研究推進プロジェクト、研究推進委員会
ねらい	赤十字リサーチ・フェスタは、赤十字系列の医療・福祉施設を中心に連携し、研究や教育の質を高め、より良い実践を行っていくことを目指す。
今年度の報告 （概要）	<p>令和2年1月27日（月）17時30分～19時30分に日本赤十字看護大学広尾ホールにおいて、赤十字リサーチ・フェスタを開催した。プログラムとしては例年実施している研究ポスター掲示、研究よろず相談、リサーチカフェなどに加え、日本赤十字社医療センター「冬の院内看護研究発表会」参加の口演、ポスター発表（示説）とともに本学で昨年度奨励研究助成、海外研修活動助成を受けた研究も発表を行い、合計8演題の研究発表と24題のポスター掲示を行った。</p> <p>また、今年度は、中根直子看護副部長を講師に迎え「日本赤十字社医療センターの研究倫理審査会の仕組みと看護研究の進め方」をテーマに研究ミニレクチャーを行い、臨床と大学との協働について考える機会となった。</p> <p>当日の参加者は、日本赤十字社医療センター、日本赤十字看護大学、日本赤十字社幹部看護師研修センターなどから、看護職、教員、大学院生など71名であった。</p> <p>今回は昨年同様に会場内の間仕切りをなくし、「冬の院内看護研究発表会」参加のポスター発表（示説）のエリア、研究ミニレクチャーのエリア、ポスター展示と研究よろず相談・リサーチカフェのエリアと参加者は関心があるところを自由に回ることができるよう工夫した。一方で、多くのプログラム、研究発表があったことから、研究よろず相談の利用や参加者間の交流がやや少ないことが課題となった。</p>
次年度の予定 （概要）	次年度も、同時期に日本赤十字社医療センター「冬の院内看護研究発表会」との合同開催にて実施する予定である。令和3年1月29日（金）を予定している。

b. “最期までその人らしい生き方を支えるケア” プロジェクト

年度	令和元年度 報告書																																	
リーダー	坂口 千鶴																																	
メンバー	川上潤子・横田和子・元田敦子・平佐靖子・及川咲・三村洋子（医療センター）、岡本薫（総合福祉センター）、坂口千鶴・千葉京子・清田明美・渡邊しのぶ・松島史絵（看護大学老年看護学領域）、比留間絵美・江見香月（博士後期課程）、佐々木舞子・鎌田真規子・中島史恵（修士課程）																																	
ねらい	地域に暮らす高齢者が最期まで自分らしく生きることを支えるために、家族の思いも踏まえながら、フォーマル、インフォーマルの関係性をもとに広尾地区という地域の中でのソーシャル・サポート・ネットワークを構築していく。																																	
今年度の報告 （概要）	<p><b>① 高齢者看護コース「最期までその人らしく生きることを支えるケア」</b> 平成 26 年度からの活動をもとに、平成 30 年度「高齢者看護コース：最期までその人らしく生きることを支えるケア」について全 5 回のコースを、医療センター、総合福祉センター、広尾地区等の病院、施設、訪問看護ステーションの看護師を対象に実施する予定であった。特に、今回はプログラム評価を目的とした介入研究として参加者を募り、介入群と対照群の 2 群を想定し、割り当てについてはランダムに実施することとした。しかし、9 月から 10 月末までの募集期間で参加者は無く、第 1 回の講演会への聴講者が 2 名のみとなったため、第 2 回目以降は中止することとなった。介入研究と兼ねたため、介入群と対照群のどちらの群に参加するのかわけられないこと、また、前回参加した方は参加できないこと、役職も制限したこと等が参加者の減少につながったと考える</p> <p><b>② 広尾コンソシアム「最期まで自分らしく生きるとは？」</b> 平成 26 年度からの活動をもとに、広尾地区で生活する人々が交流を通して最期まで自分らしく生きるとは何か、そのためには何が必要なのかを考える機会を、下記のとおり設けた。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>回数</th> <th>日程</th> <th>場所</th> <th>テーマ</th> <th>参加者数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>第 1 回</td> <td>10/31(金)</td> <td>日本赤十字看護大学</td> <td>自分の意思をどのように伝えていくのか</td> <td>3/11 名</td> </tr> <tr> <td>第 2 回</td> <td>11/22(金)</td> <td>総合福祉センター</td> <td>継続は力なり～脳は NO ではない～</td> <td>4/12 名</td> </tr> <tr> <td>第 3 回</td> <td>11/23(土)</td> <td>医療センター</td> <td>「自分らしく生きる」について考えてみませんか？</td> <td>10/14 名</td> </tr> <tr> <td>第 4 回</td> <td>1/31(金)</td> <td>広尾ガーデンヒルズ</td> <td>人生いろいろ～医者資質～</td> <td>14/20 名</td> </tr> <tr> <td>第 5 回</td> <td>3 月中旬</td> <td>日本赤十字看護大学</td> <td>新型コロナのため中止</td> <td></td> </tr> </tbody> </table>				回数	日程	場所	テーマ	参加者数	第 1 回	10/31(金)	日本赤十字看護大学	自分の意思をどのように伝えていくのか	3/11 名	第 2 回	11/22(金)	総合福祉センター	継続は力なり～脳は NO ではない～	4/12 名	第 3 回	11/23(土)	医療センター	「自分らしく生きる」について考えてみませんか？	10/14 名	第 4 回	1/31(金)	広尾ガーデンヒルズ	人生いろいろ～医者資質～	14/20 名	第 5 回	3 月中旬	日本赤十字看護大学	新型コロナのため中止	
回数	日程	場所	テーマ	参加者数																														
第 1 回	10/31(金)	日本赤十字看護大学	自分の意思をどのように伝えていくのか	3/11 名																														
第 2 回	11/22(金)	総合福祉センター	継続は力なり～脳は NO ではない～	4/12 名																														
第 3 回	11/23(土)	医療センター	「自分らしく生きる」について考えてみませんか？	10/14 名																														
第 4 回	1/31(金)	広尾ガーデンヒルズ	人生いろいろ～医者資質～	14/20 名																														
第 5 回	3 月中旬	日本赤十字看護大学	新型コロナのため中止																															
次年度の予定 （概要）	高齢者看護コースについては、5 年間実施してきて参加者も少なくなったことから終了して、次のステップに移ることも視野に入れて検討していく予定である。広尾地区の住民を対象にしたプロジェクトについては、今後も日本赤十字大学、医療センター、総合福祉センター、ガーデンヒルズ等で実施していきたいと考えているが、新型コロナ肺炎の影響を考えると実施は難しいのではないかと考える。これも 1 年延期して、内容を精錬させていく必要があると考える。																																	

c. UNICEF/WHO 母乳育児支援 20 時間コース基礎セミナー

年度	2019（令和元）年度 報告書
リーダー	廣瀬孝子（日本赤十字社医療センター）
メンバー	日本赤十字社医療センター： 川井由美子 大野芳江 田中律子 趙嬉瑛 中根直子（中村志津佳） 日本赤十字看護大学：井村真澄 塚本恵弥
ねらい	赤ちゃんにやさしい病院運動（Baby-Friendly Hospital Initiative）における母乳育児を保護・支援・推進できる病院スタッフの知識、技術、態度を育成する。 母親と赤ちゃんにやさしいケアを提供できるためには、スタッフ同士がやさしくサポートし合える関係を体験し、築くことが重要である。会においてはスタッフ同士のコミュニケーション能力やエモショナルサポート能力、ピアサポート能力も育成する。
今年度の報告（概要）	「UNICEF/WHO 母乳育児支援ガイド ベーシックコース」（医学書院）のテキストにそって 3 日コースを開催する。 参加者：13 名 日にち：7 月 21 日（日） 8 月 11 日（日） 10 月 19 日（土） 開催場所：日赤医療センター 5 階 MF ホール トピック講義担当者（敬称略）医師：宮内、笠井、土屋、中尾、大石、薬剤師：小林、助産師：中根、坂上、大林、および企画者  事前の企画会議を複数回実施。 名簿作成、資料準備、講師依頼・調整、当日の講義およびファシリテーション、事後ブリーフィングミーティング、コース終了後の感想レポート確認を行い、臨床の課題解決と次回の課題抽出と企画につなげる。
次年度の予定（概要）	年 1 回で 20 時間セミナーの企画・運営を続ける予定であるが、IBCLC を増やし、今後の企画・運営に携わるスタッフを増やす。臨床では、新人の母乳育児支援が課題となっているため、新人向けの内容も考えていきたい。

d. 小児看護研究会 CandY (Children and You)

年度	2019 (令和元) 年度 報告書
リーダー	江本リナ
メンバー	江本リナ、川名るり、山内朋子、鶴巻香奈子、神谷美帆 (日本赤十字看護大学) 日本赤十字社医療センター 間所利恵・井出拓也
ねらい	子どもと家族にかかわる看護師やその他の専門職者が、実際に臨床場面で対応に困っていること、援助の方向性について悩んでいることについて、事例を通して考えたり、小児看護に関連したテーマについてディスカッションしたりすることを目的に、小児看護研究会を行っている。
今年度の報告 (概要)	対象 子どもと家族にかかわる看護師、およびその他専門職者 参加費 100 円/年間 (資料・お茶代として) 会場 日本赤十字看護大学内  第1回 5月17日 (金) 第2回 6月21日 (金) 第3回 7月19日 (金) 第4回 12月20日 (金) 第5回 1月17日 (金)
次年度の予定 (概要)	ケアリングフロンティア関連施設から、ディスカッションしたいテーマや事例を提供していただく回数を調整し進めていく。

e. 精神科看護事例セミナー

年度	2019（令和元）年度 報告書																									
リーダー	小宮敬子																									
メンバー	鷹野朋実、松本佳子、堀井湖浪、古城門靖子、藤本法子（日本赤十字看護大学）																									
ねらい	<p>‘精神科’に限らず、多様な領域から提出された事例について詳細に検討するセミナーであり、以下の2点を目指している。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 新たなケアの視点を見出しかわりの糸口を作ることで、関心や動機づけを高めることで、看護ケア能力の向上を図る。</li> <li>2. 日頃の看護ケアに悩んでいる参加者に情緒的サポートの場を提供する。</li> </ol>																									
今年度の報告 （概要）	<p>原則として第4金曜日に、臨地で勤務する看護師の参加に配慮して18時45分～20時20分の時間帯に、当初の企画通りに年間8回を開催した（表1参照）。看護職種は原則的に自由に参加できるようにしており、セミナーの開催案内は本学ホームページを通して行っている。検討された事例は精神科病棟が大半であったが、訪問看護ステーションの事例もあった。内容については倫理的配慮から省略する。</p> <p>なお、参加者からの要望もあり、今年度より希望する参加者に対する参加証明書の発行を開始した。</p> <p style="text-align: center;">[2019年度の開催月ごとの参加者数]</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <thead> <tr> <th></th> <th>4月</th> <th>5月</th> <th>7月</th> <th>9月</th> <th>10月</th> <th>11月</th> <th>1月</th> <th>2月</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>参加者数</td> <td>13</td> <td>16</td> <td>19</td> <td>10</td> <td>16</td> <td>11</td> <td>14</td> <td>11</td> </tr> </tbody> </table>									4月	5月	7月	9月	10月	11月	1月	2月	参加者数	13	16	19	10	16	11	14	11
	4月	5月	7月	9月	10月	11月	1月	2月																		
参加者数	13	16	19	10	16	11	14	11																		
次年度の予定 （概要）	<p>2020年度も同様に開催していくことを予定しているが、開催曜日を火曜日に変更する。</p> <p>災害、不測の事態による中止、延期が起これることに配慮し、ホームページにてその旨を公表し、情報提供していくこととした。適宜、現状にあわせて運営していく予定である。</p>																									

f. TRC研究会 (Total Renal Care)

年度	2019 (令和元) 年度 報告書
リーダー	守田美奈子
メンバー	<ul style="list-style-type: none"> <li>・加藤ひろみ、関根光枝、渋谷紋子、今井早良、池田美里、齋藤侑郎、堀内勇人 (日本赤十字社医療センター)</li> <li>・守田美奈子、本庄恵子、住谷ゆかり、酒井智恵 (日本赤十字看護大学)</li> </ul>
ねらい	<p>個々の患者に最適な全人的総合的腎不全医療 (包括的腎不全医療 : Total Renal Care:TRC) の推進・普及を目指す。</p> <p>「学は分野横断的」、「実践は地域一体型」という理念のもとに、学と実践の有機的交流を通じた、新たな腎不全医療モデルの創造を目的とする。</p>
今年度の報告 (概要)	慢性腎不全患者を対象とする AC の実践に関して、看護職を対象にインタビューを行い、ACP ケアモデルの検討につなげる
次年度の予定 (概要)	ACP の実践ガイドブックを (ACP 研究会で作成) もとに、ACP の実践について検討する予定である

**g. セルフケア能力を高める支援の検討会（SCAQ 研究会）**

年度	2019（令和元）年度 報告書
リーダー	加藤ひろみ（日本赤十字社医療センター）
メンバー	加藤ひろみ・那須照代・池田美里・加藤まこと・スミス美保子・渋谷紋子・石井佳代・小林千恵・小林章子・矢野京子・藤原玲子・北川千夏子・柴田真利亜・下田茉莉子・横田和子・後藤薫・川上潤子（日本赤十字社医療センター） 本庄恵子・田中孝美・住谷ゆかり・桐原あずみ・工藤有希・池田圭子・竹山美穂（日本赤十字看護大学）
ねらい	入院—外来通院—在宅療養を視野に入れ、一人ひとりの生活を視野に入れたセルフケア支援を展開することをめざす。志を同じくする仲間を募り、広尾地区の赤十字から、セルフケア支援を世の中に向けて発信する。
今年度の報告 （概要）	<p><b>（1）セルフケア支援会議（月に1回開催）：</b>日本赤十字社医療センターで、月に1回1時間、検討会を開催し、セルフケア支援を展開する方略を練った。</p> <p><b>★アクション・リサーチ：</b>「セルフケア支援を行う看護師を育成するプロジェクト」を、赤十字助成金の助成を受けて実施している。</p> <p><b>（2）事例検討：</b>2019年度も「先輩ナースと管理者のためのセルフケア支援研修」を受講した看護師が公開リフレクションを行い、セルフケア支援の学びを深めた。</p> <p><b>（3）セルフケア支援の記録：</b>セルフケア支援の記録について、SCAQスコアと支援内容の記入、および、SCAQのレーダーチャート（エクセルファイル）を電子カルテに導入。外来や病棟、病棟間の継続支援や連携などについて検討した。</p> <p><b>（4）院内でのセルフケア支援教育：</b>院内の教育企画室と連携して、経験年数3年目程度の人を対象とする「セルフケア看護研修（プライマリーナースベーシックコース）」を実施した。セルフケア支援の「思考がみえる視覚教材」を作成して活用した。また、プロジェクトメンバーが企画した、熟練ナースを対象とする「先輩ナースと管理者のためのセルフケア看護研修会」を実施した。</p>
次年度の予定 （概要）	<p><b>（1）定例会、事例検討、セルフケア支援教育の継続：</b>月1回の定例会を継続し、年1～2回のセルフケア支援研修を企画・運営する。</p> <p><b>（2）セルフケア支援教育の評価：</b>赤十字助成金研究「看護部の理念を具現化する「セルフケア支援」を行う看護師を育成するプロジェクトの検討」で、セルフケア支援研修会の実施と評価をまとめる。</p> <p><b>（3）成果の公表：</b>看護系の学術集会にて、2019年度の成果を公表する。</p> <p>*平成30-31年度赤十字助成金にて、研究的取り組みを実施している。</p>

#### h. シームレスな看護師教育モデルの検討：しなやかな葦のような強いナースを育てる会

年度	2019（令和元）年度 報告書
リーダー	川上潤子（日本赤十字社医療センター）
メンバー	後藤薫、渡邊美香（日本赤十字社医療センター） 江本リナ、本庄恵子、守田美奈子、佐々木幾美、西田朋子、（日本赤十字看護大学）
ねらい	教育現場と臨床が相互に協力しあい、基礎教育から継続教育に至るまでのシームレスな教育モデルを検討する。骨太のナース、しなやかな葦のような強いナースを育むことをめざす。
今年度の報告 （概要）	引く続きデータ分析を行い、実践へつなげる取り組みをする。
次年度の予定 （概要）	当プロジェクトのねらいを考慮しても、新卒でも急性期看護の本質ややりがい・おもしろみを伝えていくために、臨床・教育現場がどのように連携・協働していくかについて検討していくことも重要だと考える。臨床と大学とでお互いの役割や教育について理解しあう機会がもてるような企画を計画する。

---

2019（令和元）年度 日本赤十字看護大学 地域連携・フロンティアセンター実績報告  
作成年月 令和2年8月  
発行 日本赤十字看護大学 地域連携・フロンティアセンター  
編集 フロンティアセンター 広報・事務部門  
〒150-0012 東京都渋谷区広尾 4-1-3  
日本赤十字看護大学  
電話：03-3409-0924  
FAX：03-3409-0589

---